



わたしが見た

藤川文化堂

択捉島

はじめに

はじめに

2016年12月プーチン大統領が来日し、安倍首相と会談するというニュースが流れていた。北方領土問題について何か進展があるのではないかとよく話題になり、テレビや新聞でも特集が組まれることもあった。ある番組では北方領土からの中継もされていた。場所は色丹島、キム・アンドレイという記者がマイクを持って報道していた。この記者は極東ロシア在住だそうである。きれいな日本語で現地の状況を伝えていたが、どうして日本人記者ではないのかと気になった方も多いのではないだろうか。

現在、北方領土に行くことができるのは人的交流、学術的交流などいわゆるビザなし交流と元島民の墓参、もちろん報道関係者も渡航は可能であるのだが、それらは事前に予定計画されているもので、定期便などはない。それでも渡航しようとするならビザを取得して行かなければならない。その場合はロシア経由になる。しかしビザを取って北方領土に行くことは、北方領土がロシア領であることを認めることになってしまうため、日本政府はその方法を認めていないのだ。

日本人が自由に行くことができない北方領土。そんな地域にわたしは5年ほど前に行ったことがある。行ったところは択捉島。北海道からはいちばん離れている島である。わたしが見た択捉島はどんなところだったのか。写真や記憶から当時を振り返ってみた。

運よく択捉島に

「日本語講師募集。場所：国後島、択捉島、色丹島」短くすれば、そのような募集であった。北方領土か、行けるなら行ってみたい。派遣されるのは夏の1ヶ月間、その時期は時間的に余裕があった。講師に選ばれる確率は極めて低いだろうが、いい機会だから応募しようと準備を始めた。郵便局に応募書類を出しに行ったのは締め切り直前であった。

ある日、高校時代の友人2人と会っている時に電話が鳴った。このタイミングでの電話に想定外、しかも書類審査を通過したので面接に来てくださいとのことさらに驚いた。いっしょにいた友人2人は電話が終わるとすぐ「何々、どうしたん？」と興味津々で話しかけてきた。わたしが急に真剣な顔になり、メモを取りながら標準語で話をしていたので、友人が質問してくるのは当然のことだった。

面接は東京で行われた。完成間近のスカイツリーをちらっと見て、面接に向かった。集団面接だった。面接で何を聞かれたのかはよく思い出せない。面接が終わってからいっしょに面接を受けた男子大学生とコーヒーを飲んだ。日本語教育や北方領土にも詳しい彼と話をし、自分より彼が選ばれるだろうと感じた。

面接から数日後、択捉島派遣に選ばれたと電話で告げられた。うれしさより驚きの方が大きかった。担当者にわたしが選ばれたのですねと確認もしたぐらいだ。これまで運の良さを自覚したことはなかったが、きっと運もよかったのだろう。早速本屋に行ってロシア語入門を買ってきた。択捉島の住民はロシア人である。ロシア語も少しぐらい知っておいた方がいいと思ったからだ。しかし、短期間で本を読んで理解できるほど、ロシア語は簡単ではない。文字も読みにくいものもある。今度は耳から入れてみよう、NHK教育放送のロシア語講座を録画して見るようにした。聞き取るのも難しい。「ハラショー（良い、了解）」と「スパシーバ（ありがとう）」という言葉だけが頭や耳に残る。結局ロシア語はその2つと「イクラ（魚の卵）」しかわからず、「ズドラーストヴィチェ（こんにちは）」とあいさつができるようになったのは出発前であった。

北方領土派遣の打ち合わせ会が東京であり、派遣されるメンバーと初めて顔を合わせた。いっしょにコーヒーを飲んだ彼も来ていた。わたしの予感どおり。彼は選ばれると思っていた。早速声をかけた。よかった、わたしのことを覚えていてくれていた。彼は色丹島に派遣されるそう。派遣されるメンバーは若い人が多かった。みんな優秀な人に見える。そう、みんな選ばれてきている人たちである。

択捉島に派遣されるメンバーは同じ日本語講師のNさん、通訳のMさん、政府同行者のIさんとわたしの合計4人。派遣人数とメンバー構成は国後島、色丹島も同じである。

択捉島に向かう

択捉組と国後組は出発日が同じであった。北方領土に向かう船が出るのは根室。中標津まで飛行機で行き、そこからバスで根室に向かった。宿泊した根室のホテルには6月だというのにまだストーブがあったのには少々驚いた。

出発当日、トラックに荷物を積み込み、根室港に向かった。港には訪日交流事業で日本に来ていた北方領土のロシア人の一行やそれを見送る日本人関係者たちなど、すでに大勢の人たちが来ていた。わたしたちも関係者に見送られる中、ロシア人とともに北方四島の交流事業で使用される船「えとぴりか」に乗船し、16時の出港を待った。「えとぴりか」という船、前年までは他の船を使っていたそうで、わたしたちが乗った船はその年から使用される新しい船だった。





わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島

船は揺れも少なく、食事もおいしかった。浴場もあってのんびり湯船につかることもできた。ベッドは少し窮屈だったが、旅のベッドとしてはいい感じで、知らない間に眠りについていた。

翌日朝、国後島沖で入域手続きのためロシアの沿岸警備隊の職員が船内に入ってきた。制服制帽のせいであろうか、威圧的で厳格な感じがした。政府同行の方と通訳さんが手続きを済ませてくれた。その後国後組と国後のロシア人は警備隊が乗ってきた船で港に向かって行った。



わたしが見た択捉島



わたしたちが乗った船は次に色丹島に向かった。湾内に入ると浅瀬や浜辺に放置された廃船や戦車などが目に入ってきた。船はその前を通り過ぎ、穴澗港に直接接岸した。港はこの年から新棧橋の使用を開始したそうだ。色丹島では日本人の下船はなく、ロシア人だけが下船していった。

。



わたしが見た択捉島



国後島、色丹島で多くの人が下船し、船内に残ったのはわたしたち4人と択捉島に住むロシア人たち。急に人数が少なくなり、にぎやかだった船内や食堂も空席が目立った。船内に残ったロシア人をチラチラ見ながら、島でも顔を合わすのかなと考えていた。

択捉島の内岡（なよか）港には次の日の朝に入る予定であったが、低気圧が接近中とのことで、波が高くなる前に急遽上陸することになった。ベッドの上で休んでいた体を起こし、出していた小物類をかばんに入れ、下船準備を始めた。船内は急にあわただしくなった。部屋を出て荷物をデッキに運び出した。ロシア人の多くはすでに下船準備ができていた。わたしたちが乗ったえとぴりかは直接港に接岸できないため、沖で鯨（はしけ）と呼ばれる平底の小舟に乗り移り、港に接岸上陸する。さあ下船するぞと外に出て海を見た。海面が不気味な黒色だったのを覚えている。「荷物出すよ」後ろから声がかかった。荷物は人から人に手渡され、はしけに運ばれる。わたしたちの荷物も流れるように運び出された。荷物の流れが止まった。「もう乗っていいよ」と日本人船員に言われ、はしけに乗り移り、残りの荷物をはしけの上で受け取った。

さっきまで乗っていたえとぴりかを見上げた。暗闇に見えるのは白色の船体だけ。はしけはタグボートに引かれて暗闇の中を進んでいった。えとぴりかの灯りがどんどん遠くなっていく、少しワクワクしている自分に気がついた。進行方向に小さな灯りが見え、港に近づいたことがわかった。はしけはゆっくりと港に入っていった。この時間の上陸は予定外のことであったが、港にはすでに受け入れ関係者たちが迎えに来てくれていた。ロシア語が飛び交う中、まずは荷物を陸にあげた。誰の荷物なのかは関係なく、近くにあるものからどんどん陸にあげていった。ロシア人たちの荷物の多くは買い物やお土産類だ。段ボールに入れられた荷物にはロシア語で色々書いてあった。おそらく荷物の持ち主の名前であろう。なんと自転車や三輪車もあった。大体の荷物がなくなったところで陸にいたロシア人がわたしを呼んだ。幅60cmほどのステンレス製の渡し板を少し上り、ついに上陸した。こうして記念すべき一步を踏んだのであるが、少ない灯りで周囲の物しか見えず、遠くは暗闇だけであった。



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島

宿舎と学校

わたしたちの受け入れを担当してくれるロシア人はトラックと四輪駆動車で迎えに来てくれた。教材や生活用品など持ち込む荷物が多く、全部積み込みできるかどうか心配したが、手際もよくすべての荷物がトラックに積み込まれた。宿舎までの移動中、周囲は真っ暗で何も見えなかったが、道路が舗装されていないことは車から伝わってくる振動で分かった。暗闇の未舗装道路を結構なスピードで進む。これまであまり味わったことがない感覚だ。車内に聞こえるロシアの歌、なんだか外国に来たような気持ちになった。道路が舗装区間に入り、車は静かになった。しかしすぐに未舗装道路になり、さっきまで走っていた舗装された道路の快適さを思い出す。そこで車はブレーキをかけ停車した。目の前に建物、今日はここに泊まるのか。

宿舎となったのは一般のロシア人家庭も住む共同住宅の2階にある一世帯分、ゲストルームとして使っているらしく、すぐに生活できるようになっていた。トラックに積んだ荷物はロシア人パワーでどンドンと2階の宿舎の中に運び込まれて行った。荷物を運んでいる時、通訳のMさんがロシア語を訳してくれた。わたしたちはここで1ヶ月生活するのだそうだ。突然の日程変更で、初日はどこか別のところで寝るのだらうと思っていたが、そうか、ここか。ロシア側が動いてくれたおかげで一日早く宿舎に入ることができたのだ。段ボールを開け、中のものを出すスピードも気持ち速くなってきた。部屋割も済ませ、自分の部屋でスーツケースを開ける。初日の夜は物品の設置や荷物整理であっという間に時間が過ぎていった気がする。この日、北方領土で使われている時間に時計を合わせた。本土の時間より2時間早いという。

翌日朝、部屋の窓を開け、周囲の景色を初めて見た。外から冷たい空気がスーッと入ってきた。混じり気のない空気が気持ちよかった。この日は雲が多く、宿舎から見える山は雲がかかっていて頂上までは見えなかった。マウンテンパーカーを着て外に出てみた。両手を挙げフーッと大きく深呼吸をする。頭に地図を浮かべ、今立っているところは北海道のさらに東だと自分に言った。ひんやりとした寒さから本土からの距離も実感した。外に出て最初に目に入ったのは色鮮やかな集合住宅、本土にはない色づかいだ。わたしたちの宿舎がある住宅も緑と黄色で塗られていた。

宿舎がある場所は日本語で紗那（しゃな）とよばれる地区だ。宿舎近くにあった政府の人道支援で作られた発電設備、そこには択捉島住民用発電設備、択捉島紗那非常用ディーゼル発電と書かれてあった。紗那という地名を見て紗那はまだ存在しているのだなとうれしく思った。



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島

宿舎から紗那の目抜き通りを渡ってすぐのところに紗那初等中学校がある。そこで子どもたちや島民に日本語を教えることになった。実は択捉島に来るまで日本語を教える場所がどこになるのかわらされてなかったのである。学校は宿舎からすぐの場所にあるのだが、最初、学校を案内されたときは車に乗せられて行った。

この学校の教室で午後に小学生を対象にした講座、中学生以上と大人は夕方から講座を開いた。学校の中は靴でそのまま入るのかと思っていたが、スリッパに履き替えるようになっていた。校舎の中は清掃も行き届き、きれいな印象を受けた。ただ、トイレの個室にはカギがなかったのを覚えている。3つ4つあった個室のすべてになかったのはたまたまなのだろうか。

学校の中にはロシア国旗やプーチン大統領の写真も飾られてあった。気になったのはロシア国旗の横にある水色の旗。択捉島が属するサハリン州の旗だそう。日本が固有の領土だと主張している北方領土を含め、千島列島や樺太がしっかり旗の中に入っていた。似たような絵が描かれたヨーグルトを紗那のスーパーで見た。パッケージには樺太と国後島、択捉島が描かれている。北方領土は返還されるのだろうか、スーパーでそんなことを思いながらヨーグルトを買った。お土産にしようかなと考えたが、日持ちはしないので、その日のうちに飲んでしまった。



わたしが見た択捉島



わたしが見た択捉島

択捉島に来て数日後、空が気持ちよく晴れ渡った。これまで見えなかった山の頂上が部屋の窓からくっきりと見えた。山の上の方はまだ気温が低いのだろう。雪が残っているのも確認できた。この山は散布（ちりっぷ）山というそうだ。



わたしが見た択捉島

紗那の町

紗那の町

紗那の町は地形的に見て、学校がある上部と行政機関がある下部に分かれているような感じを受けたので、ここでは上の町、下の町と呼ぶことにする。上下の町は目抜き通りで繋がっており、上の町の学校近くから下の町の入口ぐらいまでは舗装されていた。上の町から下の町を見た。地形は変わっていないのだろう。終戦前の写真と見比べてもほとんど同じであった。



宿舎から目抜き通り沿いに少し歩くと小さいスーパーが数軒あり、そこでよくビールやつまみなどを買った。写真がないのが残念だが、ロシアのビールにはラベルに数字が書かれてあるのがあって、ビールの名前がわからない代わりに番号でビールを覚えた。昨日は3番を飲んだから今日は7番を飲もうといった感じである。9番のビールはアルコール度数が9%と聞いた。飲んでみると、なるほどそんな感じもした。お菓子やインスタント食品は韓国のものが何種類も売られていた。また乳製品やハムなども豊富にあったのも覚えている。店のスタイルは2つ。カウンターの奥にある商品を店員に言って取ってもらい購入する形と、普通のスーパーのように自分で商品をかごに入れてレジに持って行き清算する形があった。



わたしが見た択提島



宿舎から歩いてすぐのところにある児童公園、普段はあまり気にすることなく、その前を通っていたのだが、ある日、公園の遊具などにペイントをしている人を見かけた。その次の日にはペイントをしている人の他に草刈りをしている人もいた。さらには道路の白線までもきれいに塗りなおしていた。その理由をロシア人に尋ねた通訳のMさんの話ではメドベージェフ首相が近く択捉島に来るかもしれないということで、その準備をしているとのこと。迎えようとしていたメドベージェフ首相は国後島に行き、択捉島には来なかったが、町は少しきれいになった。



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島



郵便局にも行ってみた。わたしたちの宿舎ではネットができなかった。郵便局に行けば、そこにあるパソコンでネットができると聞いていたからである。ネット利用は使用時間によって金額が決められる。設置されていたパソコンの動きはとても遅かった。しかも残念なことに日本語は文字化けして読めず。ネットを早々に終えて、択捉島に来た記念に両親に手紙を出してみることにした。何日ぐらいで家に届くのだろう。手紙の内容よりいつ届くのか、それが気になって出したのである。両親に手紙がいつ届いたか尋ねると、わたしが戻って来るちょっと前だということであった。択捉島からの手紙は届くまでに3週間から4週間かかるようだ。ずいぶんと遠回りして届けられるのだろう。



宿舎から下の町まで歩いて15分ほどで行くことができる。下の町には電化製品や車のパーツを売っている店やバーなどがあつた。そういえば択捉島に来てから飲食店を見ることはなかつた。下の町で初めてみたバー、簡単な料理もありそうだ。少し怪しい感じもするバー。通り過ぎてから一度振り返って見たが、結局行く機会ではなかつた。

わたしたちは朝昼夜3食すべてを受け入れロシア人の事務所の食堂で食べていた。ロシア人女性の手作りでおかずはバリエーションも多く、とてもおいしくいただいた。しかし1ヶ月もい

ると、正直、日本の味が欲しくなることもあった。



わたしが見た択捉島



わたしが見た択捉島



わたしが見た択捉島

かつて日本人が住んでいたころは下の町に人口が集中していた。町を観察しながら歩いていると、日本人が住んでいた名残を見つけることができた。神社にあったと思われる大きな石や石垣のあと。少し離れたところには日本人墓地もあって、わたしたちが滞在している間には元島民の方たちがお墓参りに来ていた。あるロシア人からは島で見つけたという日本の古いお金を見せてもらった。



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島

町には日本車が多く走っている。択捉島の道路は右側通行だが、日本車は右ハンドルのまま、車には〇〇トヨタと販売店のシールが貼ってあった。島民が生活で使っている車は日本車が多く、バスや運搬車両はロシア車であった。ロシアの車はスタイルは古いが、わたしにはかっこよく見えた。町を歩いている時には止まっている車や行き過ぎる車を目で追ったり写真を撮ったりした。



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島



ある日、韓国車を見つけた。運転しているのは韓国人ではないか。択捉島に韓国人が来ていることはロシア人から聞いて知っていた。車に手を振ってみると少し先で止まってくれた。駆け足で車に行って話しかけてみた。やはり韓国人だった。港湾工事の関係でソウルから数名が択捉島に来ているという。韓国語で話しかけたのでわたしのことを韓国人だと思ったようだ。彼らは島に唯一ある木造2階建てのホテルを宿舎としているそうだ。その宿舎に韓国焼酎やキムチもあるから飲みに来いと誘われたが、残念ながら行く機会がなかった。お酒も飲みたかったが、それよりも択捉島で会った韓国人の話が聞きたかった。日本人と韓国人が択捉島にいるのである。どうやって択捉島に来たのかもお互い気になるところだろう。普段聞けない話もお酒が入ると聞ける雰囲気になる。彼らは日本のことが嫌いかもしれないし、日本の悪口をあることないことバシバシ言うかもしれない。それでもよかった。いっしょにお酒が飲めなかったのは本当に心残りである。

紗那以外の場所

滞在中、授業がない日はロシア人と一緒に紗那以外の場所に行くこともあった。彼らが連れて行ってくれた場所の中で驚いたのは温泉である。2ヶ所の温泉に行ったが、そのうちの一つは択捉島の大自然の中にあった川のような温泉だ。指臼（さしうす）温泉といただろうか、その温泉のすぐ横にはバーベキューができるよう建物も整備されていた。水着を着て川に入るようにして温泉に入った。お湯の温度もちょうどいい。熱いのが好きなら上流の方に行けばいいと言われ、試してみた。確かに上の方が熱いお湯だった。この日わたしたち以外に温泉に来ている人たちは少なく、のんびりと楽しむことができた。



わたしが見た択捉島



わたしが見た沢提島



もう一つの温泉は有萌（ありもい）の海のそばにあった。ちょうど小学生が遠足に来ていて、子どもたちの大きな声が聞こえたり、走り回ったりして賑やかであった。ここの温泉のメインは建物の中にあるが、外にある池も温泉となっていて入ることが可能だ。

指臼、有萌の温泉とも水着を着て入る男女混浴である。



7月に漁師の日という日があった。この日は漁師の祭りが有萌で開かれるというのでみんなで行ってみることにした。会場にはステージが設けられ、すでに多くの人に来ていた。ステージでは劇が演じられたり、歌やダンスの発表もあった。露店もいくつか出ていて、お酒を飲んでいる人たちも多くいた。活気で溢れた会場はいつの間にか、ダンスを始める人々によってさらに盛り上がりを見せ、わたしたちもダンスの輪に加わるようになった。日本語講師のNさんはロシア語が話せるので、ロシア人と打ち解けるのも早いし、慣れている。Iさんは陽気なダンスと軽快なステップで年齢を感じさせず積極的に攻めていた。その隣で壊れたダンス人形が動いているような姿のわたし。ロシア人はわたしにロシア語でパンパン話かけてきた。何を言っているのかわからないが、「こう踊るんだぜ。腰はこうだ、そして足はこうだ」って感じだろうと解釈した。みんな友好的で笑顔いっぱい。言葉は必要なかった。





わたしが見た択提島



紗那の町でよく小さいバスが通っているのを見かけた。いつ製造されたのかもわからない渋さのある外観のバス。どこに行くかわからないが、バスを見るたびに乗ってみたいと気になっていた。ある時、通訳のMさんにそのことを言ってみた。Mさんは早速調べてくれて、残り少ない日程の中、バスで出かける日を決めた。



わたしが見た択捉島

わたしたちが乗るバスは別飛行き。元々バスの路線が少なく、内岡行きか別飛行きしかない。バスを楽しむのなら別飛行きということで、別飛行きに決めたのだ。このバスは別飛についてすぐ、紗那行きになり、紗那に戻ってくるという。バスは1日2本、朝と夕方である。わたしたち4人は当日朝早く起き、乗り遅れないよう早めにバス停に向かった。ロシア人のおじさんがやって来た。おじさんもバスを待っている。

まもなく左側からバスがやって来た。車内はすいていたのでみんな思い思いの座席に座った。シートはちょっと硬いなあ、窓はどうなっているのかな？バスの中をチェックしていると、バスは未舗装区間に入り、聞こえる音や振動が変わった。択捉島に来てから何度も未舗装道路を車で通った。乗っていた車が日本車だったので心地悪さはさほど感じなかった。が、バスは違った。ロシア製でいかにも古い。座席と手すりしかない車内。クッション性が悪く、床から直に伝わって来る振動。揺れも結構あり、エンジン音も大きかった。バスはすでに山道に入っていた。窓からの景色、車内のロシア人乗客を見るも体が少しバウンドしているので視界も揺れていた。これ、いいなあ。こんなバスは好き嫌いが分かれると思っていたが、いっしょに行った3人はみんなよかったと話していた。紗那から別飛まで30分ちょっと、往復で80分ぐらいだった。

この日は授業があり、そこで別飛にバスで行って来たことをロシア人に話した。もちろん通訳のMさんがロシア語に訳して話してくれた。ところがなぜか反応がない。ロシア人は話の続きがあるだろうと思ったのか、話の後にしばらく間ができた。わたしはすぐに「何の用事もなかったけど、別飛に行って、そのまま帰って来た」と付け加えて通訳を頼んだ。ロシア人のおばさんはアハハと笑った。

ひとつ思い出せないことがある。バスの料金はどうやって払ったのかということ。乗る時に払ったのか、降りる時に払ったのか、4人分まとめてMさんが払ったのか、覚えていないのである。



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島

択捉島を離れる

日本語講座の最終日は修了式とお別れ会が開かれた。翌々日の朝わたしたちは択捉島を離れる。修了式では子どもたちの前で恥ずかしながら一人大泣きをしてしまった。まさか人前でこれほど多くの涙が流れるのかと自分でも驚いたほどであった。大人たちのお別れ会には受講生手作りの料理をたくさん持ってきてくれた。みんなの料理を全部食べようと少量ずつ食べたが、それでもお腹いっぱいになった。

通訳のMさんはこの日、特に忙しかったと思う。受講生が最後だからわたしに伝えたいことがあると言っても、Mさんが丁寧に通訳してくれた。仕事が忙しくて授業にはほとんど出られなかったが、最後だけはどうしても参加したかったと来てくれた人。わたしに褒められたことがうれしくて勉強を頑張ったという人。Mさんは先にロシア語で聞いて理解しているので、訳すときに感情のこもった日本語で通訳してくれた。わたしはこの日いちばんの幸せ者になった気分だった。

いよいよ択捉島を離れる。内岡の港にはお世話になったロシア人も見送りに来てくれた。沖には停泊しているえとぴりかが見える。あと数分で島を離れる。ハグをした。このときわたしは通訳なしでずっと日本語で話していたが、なぜか通じている気がした。はしけに乗り、えとぴりかに向かう。はしけはタグボートに引かれ、陸からどんどん離れていく。さっきまで聞こえていたロシア語はもう聞こえなくなった。





わたしが見た択捉島

タグボートのエンジンが静かになった。わたしは視線を進行方向に向けた。目の前にはえとぴりか、そして乗務員が見えた。乗務員から「お疲れさまでした。元気でしたか」と声をかけられた。その言葉を聞いて、1ヶ月の役目が終わったんだなと感じた。えとぴりかには訪日交流に行っていた択捉島のロシア人が乗っていた。



わたしが見た択捉島



わたしが見た択捉島

デッキでロシア人とすれ違いながら笑顔であいさつをした。ロシア人はわたしたちの乗船を待って、さっきまでわたしたちが乗っていたはしけに乗り移った。はしけは港に向かっている。わたしはそれをデッキで見ながら、1ヶ月前の上陸のときを思い出していた。わたしたちが上陸した時は夜だった。上陸する択捉島は見えず、真っ黒な海と船の灯りしかなかった。海から択捉島を見るのはこの日が初めてなのだ。さっきまでわたしたちがいた択捉島。次に来る機会はないだろう、見るのは最後になる。見えなくなるまでじっくり見ておこう。内岡から紗那へ向かう工事道の道。山の方に向かう道。海からでも十分に見える。集落もわかった。1ヶ月過ごした宿舎近くも見えた。だんだん小さくなっていく、もう見えなくなる。そう感じ始めたころ海の音が聞こえてきた。それまでも聞こえていたのだろうが、気がつかなかった。少し離れたところにはNさんもいた。それにも気がつかなかった。彼女もわたしと同じように思い出を見ていたと思う。



わたしが見た択提島

写真（択捉島の学校で）

写真（択捉島の学校で）

日本の子どもたちは先生の質問に答えるとき、手を上方向や前方斜め方向に向かってあげます。択捉島の子どもたちはウルトラマンが必殺技の光線を出すときのポーズを見せます。ロシアの子どもたちがそうなのかもしれません。今でも覚えています。

楽しく日本の歌を歌うとき、なんだか騒がしいとき、一心不乱に作業するとき、友だちにちょっかひを出され怒るとき。いろんなときがありました。日本語講座を受講していた択捉島の子どもたちの写真です。

速い速い。インラインスケートで学校に来ました。



授業が始まる前、黒板にお絵描き。



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島

折り紙で紙飛行機を作っています。みんな真剣。完成後、廊下で飛ばしてみました。



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島

うちわに絵を描いています。今回はロシア人の先生も参加しました。みんなかわいく描けたかな？ 漢字に挑戦した男の子もいました。さぁお披露目です。



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島

新聞紙を使ってかぶとを作りました。かぶとに色をつけたり、家紋のようなマークも作りました

。



剣道も体験してみました。日本人が打ち合う竹刀の音に驚いていました。



わたしが見た択提島

写真（普通の択捉島）

写真（普通の択捉島）

目抜き通りの朝の通勤時間帯です。オレンジや青色の大型6輪車は工場や工事現場に従業員を乗せていく専用のバスです。



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島



目抜き通りの昼の時間帯。朝に比べ車の往来が少なくのんびりした雰囲気です。子どもたちの午前中は学童保育の時間帯です。



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島



普段の町の様子です。スーパー前には仕事終わりから人が集まってきます。子どもたちもよく見かけます。



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島





わたしが見た択提島





未舗装の道。これらの道ももうすでに舗装されたのかもしれない。



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島



わたしが見た択捉島

建設中の道路や新しく造られた住宅地。1枚目、2枚目、3枚目の写真は同じ場所です。わたしが滞在している間に舗装工事が完了しました。宿舎の前を工事用車両が通ることもありました。



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島

択捉島の山や海。緑と青があざやかです。留別川で釣りもしました。砲台が残っている場所もありました。



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島



わたしが見た択提島



わたしが見た根提島



わたしが見た択捉島

択捉島から見た夕日。とてもきれいに見えます。



わたしが見た択提島



わたしが見た択捉島

おわりに

択捉島に行く前、わたしの中にあったのは「北方領土の択捉島に行ってくる」だった。それが1ヶ月後、択捉島から戻るところには「日本に帰る」になっていた。日本にいる時には感じないであろう、日本に帰るといふ感じ。その「日本に帰る感」は強くわたしを支配しているようで、択捉島の話をする時に、話の中で「帰国する日」とか「日本に戻ってから」とか「日本への手紙」とかの言葉をうっかり使ってしまいそうになる。なぜなのか。択捉島にいる間、そこがかつて日本だったと感じるだけで、日本だと思えることができなかつたからである。日本車は多く走っていたが、日本車が多く走っているからと言って日本を感じることはないのだ。

択捉島に行ったのが2012年、それから5年が経とうとしている。よく歩いた目抜き通りはわたしが行く前年に舗装された。わたしが滞在していた間もインフラ整備や開発は進められていた。今は町の様子や島の生活もずいぶん変わっているだろう。昔の水産会館はわたしが行く少し前にはまだ残っていた。しかしわたしが見たのはさら地になった跡地だった。かつてソ連軍の侵攻を伝えた紗那郵便局は危ない状態であったが、幸いにもその姿を見ることができた。しかし、今は残っていない。新しい住宅はどんどん増えていた。建設中だった新しい飛行場も完成した。

最近、択捉島の観光地化が進んでいることも知った。択捉島で最大の企業ギドロストロイ社はこれまでの水産業、建設業の他に昨年からツアーを専門とした子会社を設立したと聞く。島内で温泉施設やホテルを経営するギドロストロイ社が観光に力を入れ始めたのだ。新飛行場は大いに活用されるだろう。日本政府も元島民の高齢化に伴い、北方領土訪問に飛行機での往来ができるようロシア側と協議するという話も新聞で読んだ。

わたしが見た択捉島。インフラ整備が進む中、そこにはまだかつての日本が残っていた。今はどうだろうか。択捉島は急速な変化を見せている。それは返還が遠くなるのを意味しているかのようだ。

わたしが見た択捉島

<http://p.booklog.jp/book/112856>

2017年2月7日

著者：藤川文化堂

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fujikawabunkado/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112856>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト